

人質姫は敵国ライフを

エンジョイしてるって噂②

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

その後は、何事もなかったかのように湖を一周した。

水鳥、葦、風の層。ルーカが退屈しない程度に小話をし、カテリナが私のマントの襟を直し続ける。レオンは無言。けれど、歩幅はいつも私と合っていた。歩幅の学問。舞踏の延長みたいな散歩。

夕方、離宮へ戻るころ、頬の内側が熱っぽいのに気づいた。湖の風が思ったより芯まで入っていたのかもしれない。部屋へ戻っても、体のぞわつきは引かなかった。

「姫、顔色が」

カテリナが眉を寄せる。私は笑って首を振った。

「大丈夫。少し横になれば……」

言いかけて、よろけ、咳が一つ出た。ルーカが医師を呼びに走る。

私はベッドに腰を下ろし靴を脱ぐ。喉が敏感に空気を吸う。

扉が静かに開いて、最初に入ってきたのはレオンだった。

片手には薬瓶と水、もう片方には白い布。

「失礼する」

彼は余計な言葉を言わない。枕元に水を置き、薬を量り、私の額に

冷たい布を置く。私の視界に彼の袖の端が入る。規則正しい細い糸の縫い目。私は思う。レオンのすべては、こういう風に、節度と規律で縫われている。

「水を。起き上がれるか」

「はい」

上体を起こそうとすると、ぐらりとする。レオンが背中に手を入れて支えた。距離は最低限。彼はグラスを取って私の指のかわりに丁寧に角度を決める。

「少しずつ」

縁が唇に触れる。水の冷たさが喉を落ち、熱と絡んでいく。

グラスが離れる。息が整う。

「ありがとうございます」

「今夜はよく休むこと」

言い方が、いつもより柔らかい。私は笑って、瞼を半分閉じる。

額の布の冷たさが呼吸のたびに音もなく入れ替わる。

レオンの影が、窓からの薄光を少しだけ遮る。落ち着く影だ。

「――王子」

「何だ」

「昼間の、お礼を。ブローチのこと。そして……聞いてくれて、

ありがとう」

「礼は不要だ」

それでも、私は言いたかった。言葉にして手渡したかった。

私の“仕事”と“怖さ”を。

レオンは一步だけ近づいた。髪の毛を一筋、耳の後ろへ戻す。

「君は、よく頑張っている」

耳が熱くなる。額の布がずれ、彼がそれを直そうとして手が止まる。

距離が詰まる。彼の呼吸の動きが、ほんの少し近くなる。

額——来る、と思った。私は目を閉じた。

来なかった。ほんの指一本ぶん手前で止まり、拳を握る気配。

自分に手綱を引く音。

「……迷惑にならない距離を、取りたい」

低い声。丁寧選ばれた言葉。私を守るための言い方。私は微笑む。胸の奥で薄い音がする。ひびが入るみたいな、小さな音。

「わかりました。——私も、気をつけます」

気をつける。何に？ 噂？ 私情？ 心臓？

言葉はどれにも触れずに通り過ぎていく。

彼は布をもう一度冷たいものに替え、灯りを少し落とした。

「なにかあれば呼べ。すぐに来る」

そう言って扉へ向かう。私は呼吸を整えながら背中に言葉を投げた。

「王子——ありがとう。ほんとに」

返事はなかった。扉が静かに閉まる音だけが残る。

私は布の冷たさを額に感じながら、目を閉じた。

眠りの手前で、胸の内側がきゅっと縮む。迷惑にならない距離。

正しい。正しいのに、痛い。

ミラ。私は大丈夫、ってずっと手紙に書いてきた。ほんとうに大丈夫になるには、何を外して、何を守ればいいんだろう。

笑顔の甲冑は、役に立つ。けれど重い。起き上がれない夜も、ある。

翌朝、熱はすぐに引いた。カテリナが喜び、ルーカも安堵した。

外は晴れ。湖面は鏡。私は窓辺に立ち、両手でマグカップを包む。

——迷惑にならない距離、ね。

口の中で転がしてみる。私の解釈はきっと彼の意図より尖っている。

噂を増やさない、彼の職務を邪魔しない、私の心臓も乱さない。

ならば——私は決めた。距離を置こう。私から。

噂のためにでも、職務のためにでもなく、私のために。

立っているのがやつとるときに、笑顔が重くないように。

カップを置く。手袋をはめる。鏡の前で一回転。笑顔をつくる。

「行ってきます、カテリナ」